

# 中国帰国者三世の教育と社会移動に関する一考察 —文化変容とエスニック・アイデンティティに注目して—

## Social Mobility and Education among 3<sup>rd</sup> Generation of Returnees from China: Focusing on Acculturation and Formation of Ethnic Identities

坪田 光平  
Kohei Tsubota

The purpose of this paper is to clarify the patterns of ethnic identity and acculturation among the 3<sup>rd</sup> generation of returnee from China in Japan from the viewpoint of segmented assimilation theory. The results of the analysis, the three types of ethnic identity are found; Meritocracy, Hybrid, and Chinese Culture-Oriented. According to segmented assimilation theory, these types are affected by family structure, modes of incorporation, and ethnic community. In this paper it's found that the modes of incorporation have a strong effect on acculturation and ethnic identity among the 3<sup>rd</sup> generation of returnee from China, especially the acceptance in Japanese school and its experience, acquisition of culturally tolerant peer group, and keeping a distance from the ethnic community.

Keyword: 3<sup>rd</sup> generation of returnee from China, ethnic identities, acculturation, segmented assimilation theory

### 1. 問題設定

本稿の目的は分節的の同化理論を背景に、日本社会に育つ中国帰国者三世のエスニック・アイデンティティと文化変容パターンを明らかにすることを通じて、彼らの社会移動について仮説的なモデルを提起することである。

まず本稿でいう中国帰国者三世とは、中国残留日本人を祖父母にもつ者を意味する。中国残留日本人とは、「戦前あるいは戦中の時期に、中国大陸へ渡り、戦後長い間中国で『残留』し、1972年の日中国交正常化を契機に日本へ永住帰国するようになった人たち<sup>[1]</sup>」として定義される。日本における中国帰国者の正式統計は存在しないものの、その数は10万人を超すとも推定されている<sup>[1]</sup>。中国残留日本人は中国内では「日本人」とされる一方、日本への永住帰国後においては「中国人」とされるように、双方の社会から周辺的な地位に置かれる「引き裂かれた存在」として理解されてきた。戦争孤児でもあった彼らには日本社会への適応支援として日本語習得に加え職業訓練も実施されたものの、彼らは差別・偏見、さらには貧困を経験していることも指摘されており<sup>[2]</sup>、中国帰国者家族に対する経年的な調査研究の必要性は論を俟たない。他方これまで中国帰国者家族を対象としてきた既存研究は、日本政府の「永住帰国」政策のあり方を批判的に捉える歴史的アプローチを中心に多くの蓄積が見られ<sup>[3]</sup>、彼らが日本社会で様々な不利を経験していることを多々明らかにしてきた。しかし中国帰国者家族を

ぐる様々な不利が世代を超えてどのように継承・打開されているのか、また子世代がどのような教育経験をもとにどのようなエスニック・アイデンティティ——例えば「日本人」や「中国人」あるいは「ハイブリッド」なアイデンティティを築き、日本社会へ参入を果たしているかに注目した研究は多くない。そうしたなか、注目できるのは中国帰国者二世・三世のエスニック・アイデンティティを捉えた研究である。例えば張は「国境を越える複合的アイデンティティ」が中国帰国者二世に見られると指摘<sup>[4]</sup>している。また中国帰国者三世を対象にした研究においても、アイデンティティの帰属には日本や中国に跨る複数性が見られることが示唆されている<sup>[5]</sup>。

しかしこれらの研究では、エスニック・アイデンティティの形成が親世代との関わりから考察されているとは言い難い。一方、中国帰国者家族の世代交代が見られるなか「二世三世を含めて中国帰国者家族の日本社会への定住化が進み、帰国した中国残留日本人の間で階層分化が生じている<sup>[6]</sup>」とも指摘され、日本社会における職業訓練や能力開発にアクセス可能になるよう様々な支援の必要性が示唆される。こうした点を踏まえれば、子世代のエスニック・アイデンティティにのみ関心を向けるのではなく、まず親子の文化変容を踏まえつつ彼らの教育経験と社会移動パターンを考察する研究の必要性が提起できるだろう。このため本稿では、子世代のエスニック・アイデンティティの形成過程に親子の文化変容がどのように関わっているかを明らかにすることを課題とする。

この課題に関して本稿では、Portes&Rumbautの分節的  
同化理論<sup>7)</sup>を援用し、中国帰国者三世のエスニック・アイ  
デンティティと文化変容の関連を明らかにすることを  
通じて中国帰国者三世の階層分化について仮説的なモデル  
を提出することを試みる。分節的同化理論は、①親の  
人的資本、②編入様式（政府の受け入れ政策、ホスト社  
会の受け入れの文脈、エスニック・コミュニティの有無）、  
③家族構造の三要素が一体となって親子の文化変容パ  
ターンに違いをもたらし、子世代がどの階層に同化してい  
くかを説明するアメリカの理論枠組みとして知られる。  
無論、移民政策をもたない日本の文脈を抜きに、アメリ  
カの理論をそのまま応用することはできない。しかしこ  
の理論は、中国帰国者家族の文化変容パターンを考察す  
るうえで示唆に富む。とくに日本における編入様式に配  
慮しながら、中国帰国者三世の階層分化を考察するこ  
とが肝要である。以下、本稿では親の人的資本と編入様式、  
家族構造のうち、とくに編入様式に注意を払いつつ、三  
つのリサーチクエスチョンを設定して分析を行う。

1)親世代の移動はどのようであったか。とくにホスト  
社会の政策と受け入れの文脈に注目する。2)子世代のエ  
スニック・アイデンティティにはどのようなパターンが  
見られるか。3)エスニック・アイデンティティの分岐に  
はどのような要因が影響しているか。最後に考察では、  
以上のエスニック・アイデンティティと文化変容の関連  
だけでなく、そこに親の人的資本と編入様式（とくに、  
教育経験、仲間集団、エスニック・コミュニティ）がど  
のように中国帰国者三世の階層分化に影響するか、仮説  
的なモデルを提示する。

## 2. 調査研究の概要

本稿では日本の義務教育経験を有する中国帰国者三世  
11名を対象とした（表1）。対象者には2015年12月から  
翌年9月にかけてスノーボール形式でアクセスし、1名

につき1時間半から2時間の半構造化インタビューを実  
施した。内容は基本的な属性をはじめ、親子関係、日本  
での学校経験と仲間集団、エスニック・コミュニティと  
の関わり、アイデンティティに関する項目を中心に尋ねた。  
インタビューは許可を得て録音し、分析にはスクリ  
プト（ゴシック体表記）に起こしたものを用いた。

## 3. 親世代の移動と受け入れの文脈

### 3.1 ホスト国の政策と家族構造

中国帰国者三世とその家族の移動は、日中国交正常化  
の1972年以降、「中国残留日本人」への永住帰国政策に  
よって開始されたものである。まず理解される必要があ  
るのは、永住帰国後の家族の生活状況は必ずしも順風満  
帆なものではないということである。

彼らの出身階層は、「農村部で生活に困窮していた人も  
いれば、医師、教師などの職業に就き、比較的富裕で高  
い階層に属していた人も少なくない<sup>14)</sup>」とされている。  
しかしその一方で、5000名を超える中国帰国者を対象に  
した政府調査によれば、彼らの多くは東京、大阪、神奈  
川、埼玉、愛知に集中した居住傾向を見せ、生活保護受  
給率については6割弱であったことが明らかにされてい  
る<sup>18)</sup>。この点から、政府政策の意義と限界は多々指摘さ  
れてきた。その後、日本政府は2007年以降に満額の老齢  
基礎年金等の支給や支援給付の開始、そして地域生活支  
援事業を展開しており、中国残留日本人とその配偶者の  
生活状況には経済面で大幅な変化が見られた点を確認し  
ておきたい。しかし、『中国残留邦人』等およびその配  
偶者」を対象とする日本政府の政策は、基本的にその子  
世代を射程に入れたものではなく、彼らの社会移動を保  
障する積極的な文脈を形成しているわけではない。

こうした文脈を踏まえつつ、本稿で対象とした中国帰  
国者三世について強調したいのは、①親世代の多くが義  
務教育段階に学業中断が見られ、中国語の読み書きとい

表1 調査対象者のプロフィール

仮名	性別	年齢	生誕地	現国籍	本人学歴	現職業	使用可能言語	母国親族との連絡	配偶者選択	送金	親学歴	父現職	母現職
Z1	男	27	日本	日本	大学院卒	学校教員	日本語	ほぼなし	未定	なし	父:中卒 母:大学中退	— (母子家庭)	保険営業
Z2	女	29	中国 (13歳来日)	日本 (22歳取得)	専門卒	主婦 パート	日本語 中国語	頻繁	中国人	なし	父:高卒 母:高卒	工場	工場
Z3	女	24	中国 (7歳来日)	中国 (永住)	高卒	専業主婦	日本語 中国語	頻繁	中国人	なし	父:未就学 母:小卒	工場	工場
Z4	女	33	中国 (16歳来日)	日本 (29歳取得)	専門卒	介護職	日本語 中国語	頻繁	誰でも	なし	父:未就学 母:高校中退	無職 (生活保護)	無職 (生活保護)
Z5	女	20	中国 (6歳来日)	日本 (6歳取得)	高卒	大学生	日本語 中国語	時々	日本人	なし	継父:中卒 母:専門卒	工場	工場
Z6	男	23	日本	中国 (永住)	高卒	大学生	日本語 中国語	頻繁	中国人	なし	父:中卒 母:中卒	トラック 運転手	工場
Z7	女	21	中国 (10歳来日)	中国 (永住)	高卒	大学生	日本語 中国語	頻繁	未定	なし	父:小卒 母:小卒	無職 (生活保護)	無職 (生活保護)
Z8	男	22	中国 (4歳来日)	日本 (4歳取得)	大卒	学校教員	日本語	ほぼなし	未定	なし	父:中学中退 母:高卒	工場	工場
Z9	女	29	中国 (16歳来日)	中国 (永住)	大学院卒	大学院生	日本語 中国語	頻繁	中国人	なし	父:小学中退 母:小学中退	工場	工場
Z10	女	30	中国 (13歳来日)	中国 (永住)	大卒	専業主婦	日本語 中国語	ほぼなし	中国人	なし	父:中卒 母:高校中退	工場	工場
Z11	女	32	中国 (8歳来日)	日本 (10歳取得)	高卒	専業主婦	日本語 中国語	ほぼなし	日本人	なし	父:中卒 母:中卒	工場	— (父子家庭)

ったリテラシーに制約が多々見られることから、子世代に十分な中国語継承を行えるほど高い人的資本を有していなかったこと、そして、②親世代の多くが農業を生業にした生活設計を送っていたことが強く影響して「親族同士で助け合うことは当たり前」という相互扶助型の家族を構えていたことである。中国帰国者の教育意識については日本の大学進学を期待するように、親世代が学歴に高い教育的価値を置くことが示されてきたが<sup>9)</sup>、本稿で扱う親世代についてもこうした点は同様に当てはまる。すなわち、来日による教育環境の変化は子世代の進路選択の幅を増やすだけでなく上昇移動を促すものであり、日本への「永住帰国」は家族の生活水準を向上させる「投資」という言及が数多く語られた。こうした親世代の意向は子世代に理解されており、中国帰国者家族は渡日を通じた上昇移動を志向していると考えられる。

やっぱり俺の将来を考えてくれて、親たちと一緒に頑張ってほしいっていう。親たちが中卒だから、仕事も選べないから、本当に幅が狭くなってしまふから、せめて子どもたちにはいい職に就いてほしい。…そう、もう本当に投資。  
(2016年3月8日:Z6)

ここで明らかにしておきたいのは、中国帰国者家族の移動の形態である。本稿で指摘できるのは、中国帰国者家族は親世代と子世代のみが核家族として移動するのではなく、親族を巻き込みながら芋づる式に移動し、最終的には親族丸ごと越境していく連鎖移民としての様相を示したことである。中国帰国者家族は、中国残留日本人の家族として呼び寄せ可能であるという合法的な入国経路が切り開かれ、また親族間の相互扶助意識を媒介とすることによって、親世代と子世代が一体となり、次々に移動できる「相互扶助型移住システム<sup>10)</sup>」の形成を可能にしていた。もちろん「中国帰国者の日本への帰国定住は、政府による帰国支援、親族等の身元保証人の存在、行政官や自立指導員による具体的な支援などによって特徴づけられている<sup>11)</sup>」ため、他のエスニック集団と比較すれば入国経路は相対的に整えられている。しかしそれでも、主に国費での移動が可能であった中国残留日本人(1世)とは異なり、基本的に親族の呼び寄せにあたっては私費による移動を余儀なくされ、膨大な渡航費用を捻出するため、調査対象者の親世代は出身国の「持ち家」や「田畑」をはじめ、農業に必要な生産手段についても基本的に全て引き払ってきていた。したがって、子どもの「教育のため」に渡日し、また日本での就労を通じて親族の暮らし向きを安定化させようと展望する中国帰国者家族の移動の形態は、日中間を自由に往来できるトランスナショナルな移動の様相として理解することはできない。つまり、中国帰国者家族の移動は、出身国の生活基盤を日本に丸ごと移した「飛び地」の形態として理解される必要があるといえる。

### 3.2 エスニック・コミュニティの形成と親子関係

ここで親族間に横たわる文化的規範として確認しておきたいのは、出身国で重視された親族間の相互扶助が、来日後も一貫して継続していたことである。例えば、親族の集まりが日本で毎年の恒例行事であることは口々に語られており、年末には40人を超える親族が一堂に会するなど、親族コミュニティの結びつきの強さは越境によって失われるものではなくむしろ維持されていることを確認する必要がある。

— みんなS区の近辺に住んでいるってことなんだ。

Z5 はい。

Z9 42, 3人ぐらい。

— 年末とかに集まるっていうときに、そんなに入らないでしょう？

Z5 超きつきつ。

Z9 無理やり入るよね。

Z5 だって、最初の頃は、台所のテーブルともう一つ部屋のテーブルで収まっていたんですけど、今は3テーブル。年末にご飯食べるとき、1, 2, 3(台)。…それでも、みんな時間をずらして、交代でみたいな。

— 時間をずらして、交代で。

Z5 食べ終わったら、「じゃあ、代わるよ」みたいな。

Z9 そうそう。よくあの団地の一室に入れると思うよね。

Z5 ね。  
(2016年3月8日:Z5・Z9)

移民過程論では、移民が次々と移動することを可能にするメゾレベルの要因として「移住システム」の重要性が指摘されてきた。先に移動した移民を頼りにし、互酬原理によって低コストであり信頼を基礎とする相互扶助型移住システムの成立は、出身国で強固な相互扶助家族を構えていた中国帰国者家族の移動においても十分に妥当する。実際、出身国で形成された親族同士のネットワークと相互の信頼は、中国残留日本人の合法的な永住帰国を皮切りに、来日後のホスト社会での生活を支え合う重要な資源として高い価値を与えられていた。そのため、出身国の親族は連鎖移民として次々に家族再結合を果たし、日本社会に特有の親族コミュニティを大規模に形成することが可能になっていたのである。対象とした11名のうち親族コミュニティの構成員が少なくとも20人以上を超えるという事例は全員に共通したが、最大では60名を超える規模が回答されていた。こうした親族成員間には、来日後も「親族同士は助け合うもの」という相互扶助意識が一貫して認められる。そこではたとえ子世代が自立したとしても親族コミュニティにすぐアクセスできるよう、また、とくに子育ての相互扶助が行えるよう近くに居を構えることが重要視されていたのである。

しかしこうしたエスニック・コミュニティの形成は、親族成員間で閉じられた「閉鎖的」な性質を持つがゆえに、親世代が日本社会に適応する価値と必要性を来日当初から失わせることを示唆する。とくにこの事態は、親子間の同化速度にかなりの差を生むことで、「役割逆転

[7]の登場を示す。事実、今回調査した中国帰国者三世たちも、日本語能力に乏しい親世代との関係に困難を抱えた事実を口々に語った。例えば「親は日本に適応するって概念がない」と語る Z9 は、中学・高校時代には、突如として病院や市役所等への通訳依頼によって学校を休まざるを得なかったと語る。上記 Z5 についてもこうした点は同様に語られ、子世代の多くは日本社会に適応しようとしないう親族コミュニティに辟易しながらも、生活を送るうえで必要な書類作成のノウハウを伝えたりすることによって、何とかして自立した生活を送れるよう親世代の適応を促そうと苦心していた。「日本語が要求されない職場先はどこか」といった労働市場の情報はもちろん、「スーパーで安価な野菜があるから買った方が良い」といった情報までもが日々飛び交わされる親族コミュニティの濃密な実態が言及されたように、親子が一体となった日本社会への適応は容易ではない。

こうしたなか、とくに子どもの「教育のため」という文脈に関しては、義務教育段階で学業中断に見舞われていたため、近代学校への経験はもちろん、日本の受験システムや学校教育に対する親世代の知識獲得は非常に限定的であった。結果的に、出稼ぎによる生活水準の向上という「労働移民 [12]」としての形態を色濃くするなか、とくに子世代への教育をめぐる親世代の実態は、学習を支援したり学習意欲を高めたりする教育的サポートをひとしく欠いた点の特徴である。例えば Z7 は、親から幾度も「東大に行け（と言われた）」と繰り返しプレッシャーをかけられたエピソードを語り、有名大学の名前だけしか知らない親が自分の無知を棚に上げ、サポートすることなく口うるさく学業努力を要求することに強い苛立ちと違和感を経験したと語った。教育にまつわる親子関係の苦悩と葛藤は、対象者の多くに共通して当てはまる。

Z3 もう、「悔しい」というだけ。すごく言われるから、「你那样能考上高中吗（＝高校にいけるの?）」。もうほとんど悪口だね。「おまえ、大丈夫か。おまえ、高校に受かるのか」とか言われて。

— それは、親から言われていたの？

Z3 親もそうだけでも、親戚。X さんのお父さんにすごく言われていた。それで、それがどうしても悔しくて。あ、でも、あと、うちが貧乏だから私立は駄目だと思って、それもあって、その二つの理由で必死に頑張ってる…。  
(2016年1月27日：Z3)

在米ベトナム系難民を対象にした研究では、緊密なエスニック・コミュニティでは人の噂やゴシップが瞬く間に広がるのが指摘されている [13]。親族からの強い期待とプレッシャーが苛烈であったという Z3 の語りが明らかにしているのは、親族から強い監視下に置かれることへの苦痛と焦りである。また、進学期待が親戚中から向けられるだけでなく、常に自分の素行や学業成績が「噂」として出回ってしまうという不安は、親から十分な教育支援を受け取れないことによって、容易に反発心へと転

化する危険性と隣り合わせにある。日々親族からの期待と重圧に晒されていた Z3 は、結果的に高校進学を独力で勝ち取らなければならなかったという苦しみを満たした経験を示した。子世代のエスニック・アイデンティティは、こうした親子関係やエスニック・コミュニティとの関わりを踏まえて検討される必要があるだろう。

#### 4. 子世代のエスニック・アイデンティティ

親世代が日本社会に親族コミュニティを移し日本社会への適応努力が阻害されるなか、子世代の文化変容は一枚岩には括れない。エスニック・アイデンティティと文化変容に注目する本稿では、分析の結果、エスニック・アイデンティティに「メリトクラシー型 (5名)」、「ハイブリッド型 (4名)」、「出身国文化志向型 (2名)」を抽出した。対応する文化変容パターンと社会移動については表2の通りである。以下、それぞれの内容を検討する。

表2 エスニック・アイデンティティと文化変容

文化変容	帰属先とエスニック・アイデンティティ(EI)		社会移動	数	該当者
	帰属先	EI			
不協和的文化変容	I 日本	メリトクラシー型	上昇	5名	Z2,Z5,Z8,Z10,Z11
	II 日本・中国	ハイブリッド型		4名	Z1,Z4,Z7,Z9
文化変容への協和的抵抗	中国	出身国文化志向型	下降	2名	Z3,Z6

##### 4.1 「メリトクラシー型」の若者たち

第一は「メリトクラシー型」である。このパターンに該当する若者たちは、親世代が日本語習得はもちろん日本社会へ適応しない一方、親族コミュニティに包摂されることなく日本の主流文化に適応し「日本人化」する姿勢を見せた点で共通する(不協和的文化変容 I)。彼らは親の教育支援が十分になされなかったため、非常に苦勞した学校経験を多々語るものの、学校教員との良好な学校経験を通じて主流文化の知識獲得を深めていったことが指摘できる。該当者のうち1名は高卒にとどまるものの、残り4名は全て高等教育機関に進学しており、親世代と比較し総じて上昇移動を達成する点の特徴である。ここで強調したいのは、寡少な親の人的資本を補う文脈に「良好な学校経験」が共通して語られたことである。

Z2 …学校で分かんない勉強とかがあったら、それを(教育支援の)教室に持って行って、先生に読み方とかを教えてもらったり。教えてもらっても、読み方だけでは意味が分かんないときがあるんです。漢字を見ても、中国語の意味と違うから。

— 3年間、ずっとそこに通っていたの？

Z2 …たぶん、最初は週に1回土曜日とか、日頃の勉強と一緒に教科書を見てもらって、受験になると、三年生になる時期から、一生懸命やらなければと、毎日先生の所に通い始めたの。(2016年1月16日：Z2)

Z2 は、20 名程度の親族コミュニティを初期に経験しており、来日以前は日本社会に対して否定的なイメージを抱いていたという。こうしたなか、日々教育支援だけでなく進路選択についても懇切丁寧に応じてくれた学校教員だけでなく、学校文化に適応的な仲間集団との交流は、現在もお続けていると語った。親の教育支援の不足に対して教師が親代わりのように接してくれたと話す彼女の語りからは、親たちとは対照的にホスト国の言語はもちろん主流文化に対して順応的に過ごしていったことが窺える。一方、メリトクラシー型の若者の多くは、青年期に日本の労働市場において差別経験を有していた。そしてそうした経験を強く内面化することによって、出身国である中国に否定的な価値を与えながら「日本人化」が顕著になっていく傾向にある。Z2 は、「あの先生に出会ってなかったら、今の自分はない」と語り、学業継続に学校教員との関係が影響して専門学校への進学理由を説明した。しかしそれは、彼女が主流社会に「日本人として」生活できるよう支援した教員という文脈に注意を払う必要がある<sup>[14]</sup>。というも、彼女はその後、労働市場での差別経験によって「日本国籍」を取得する転機を急速に迎えているものの、学校経験はこうした文脈に抗えるものにはなっていなかったからである。

…仕事していると差別があるような気がするんですよ。就職の際に中国籍って言ったら、断られたりとかあったから、それで日本国籍にしようって決めて、日本国籍にしたんです。結構、差別があると思うな。…自分自身が、最初はある仕事の応募を受けていたんです。で、審査が何回もあるんだけど、多分二次審査まで進んで、最後は国籍の関連で駄目になって、そういう思いがあるから。  
(2016 年 1 月 16 日 : Z2)

インタビュー中、彼女は中国籍であることが不採用理由であると「直接言われた」経験を苦々しく語り、その経験を通じて「中国人であること」が日本社会で否定的な価値を与えられていることに気付いたと話した。その結果、強く「帰化」することの必要性にすぐさま順応し、実際その後の就職活動では中国出身であることや中国名使用は封印すべきものと捉え直されていた。移民研究においては、ホスト社会での差別待遇により疎外を深めていく過程で、移民は「対抗的エスニシティ (reactive ethnicity)」を立ち上げていくことが指摘されている<sup>[7]</sup>。そして対抗的エスニシティは、同一エスニック集団が協力し合い、出身国の文化に誇りと承認を与え合うことで高められるという。しかし Z2 が即座に「帰化」を選択しているように、彼女は差別経験を深く内面化しながら日本社会に流通する中国人ステレオタイプに敏感になっていき、親族コミュニティとの接触については「ほとんど会っていない」という自分自身の状況の変化を語った。

対抗的エスニシティが立ち上げられないこうした背景には、メリトクラシー型に該当する若者たちが主流社会に適応的な日本人の仲間集団を準拠とするなかで、エ

スニック・コミュニティに対して否定的な価値を与えていったことが指摘できる。親族コミュニティを彼らが嫌う背景として付言できるのは、例えばインタビュー対象者から「一族問題」と言及される、出身国に残された親族の送金要求に端を発したトラブルなど、さまざまな要因を挙げることができる。その一例を挙げよう。

#### Z11 (離婚の原因は) お金のことじゃない?

##### — お金のこと。

Z11 やっぱ国に仕送りとかが、うちのお母さんのほうがあるから、それでもめっちゃ。…日本に来てから、親のけんかが多くなった気がする。だから、多分、離婚したんだよ。  
(2016 年 6 月 12 日 : Z11)

Z11 によれば、中国に残る母方の祖母からは「家を建てたい」という送金要求の電話連絡が続き、両親は徐々に口論が絶えなくなったという。もちろん、当時の経済状況は決して貧しいものではなかったというが、それでも十分な貯蓄には至らない。Z11 はその後父親に引き取られたというが、高校時代は必至に学校に通いながらも、制服をはじめ必要経費はすべて母親に要求するよう冷ややかな対応を取られたという。「(中国人と結婚したら) またお金の問題が発生するから、そういうのは嫌だから、もともと中国人は目に入っていない、考えにはない」と断言してみせる Z11 は、普段から中国人との接触を極力避けているといい、日本人と結婚し現在は生活に苦しさを感じることなく 2 児の母として過ごしている。周囲の日本人と交流を深める必要性を感じるなか、子どもの幼稚園の入園面接では自分自身を「日本人」と説明して中国名がばれないよう秘匿しているという。日本で生活する親の労苦を思いやり配偶者を中国人とした事例も見られたが (Z2, Z10)、該当する家庭では離婚の危機を想起させる状況が多々示された。「これ以上中国に関わりたくない」という Z10 は、学校で親切に接してくれた学校教員や学校文化に適応的な仲間集団とは対照的に「礼儀正しくない」中国人との結婚を非常に悔やんでいると語る。主流社会の価値を内面化することと引き換えに家庭内では度重なる文化摩擦が繰り返されていたのである。

このようにメリトクラシー型に該当する若者たちは、良好な学校経験、日本人を中心とする主流文化に適応的な仲間集団を獲得するものの、差別経験に抗える資源をほとんど持たないことが指摘できる。その結果、差別経験をトリガーにして「中国人ステレオタイプ」に敏感になり、エスニック・コミュニティから距離を置きながら「日本人化」の度合いを強めていくことが指摘できる。

#### 4.2 「ハイブリッド型」の若者たち

第二の「ハイブリッド型」は、日本と中国の二つに帰属しハイブリッドなアイデンティティを見せる若者たちである。このパターンの若者たちのエスニック・アイデンティティには、二つの形成過程が導出された。その際本稿から指摘できる共通要因は、「多様な文化に開かれた

仲間集団」を獲得し準拠枠としていったことである。これは、メリトクラシー型が主流文化に適応的な日本人のみを仲間集団とするのとは非常に対照的である。このためハイブリッド型の若者たちは、自分の出自を否定することなく肯定的に受け止め、相手や場面に応じて柔軟に自己呈示したり、差別経験に抗えたりする行為性を育んでいた。まず、良好な学校経験をもつ第一のパターンを検討する。例えば16歳で来日したZ4は、当時の校長先生の配慮によって学齢主義を飛び越え中学1年生に編入したといい、中国ルーツをもつ自分を日々サポートに奔走してくれた学校に対して感謝の意を表明している。

— …結構、進路相談にも乗ってくださってたんですね。Z4 …もうすごい親身になってくださってて、悩みとかも結構聞いてくださって。でも、今まで、普通にいじめに遭ったこともなければ…。現状、社会に出たときにすごいづらいことってたくさんあるじゃないですか。そのときに、もうくじけそうになったら、先生に電話すると、いつもなぐさめてくださったりとか、何ていうかな、説明してくださるんですよ。日本の社会ってどんなところなのか、自分がどうやって、自分を持って、どうやってこう頑張っていくかとかかっていうふうなアドバイスもして下さって。(2016年1月31日：Z4)

Z4は来日以前、日本に対して否定的なイメージを抱いていたというが、中国出身であることを肯定的に受け止め、日々親切丁寧に関わってくれた学校教員との関係は、「中国人であることをあんまりばらしたくないな」と考えていた彼女の心境を大きく好転させていた。学校教員と親密な関係をもちながら仕入れた「持ちネタ」として、笑いを取りながら中国ルーツを呈示できるという彼女の語りからは、主流社会の差別を回避する戦術が見出せる。

…専門学校に行ったときは、もうほんとに、あんまり自分で中国人っていうのを言わないと、周りが全然…。気付かないので、周りより年上っていうのもあって、一応、みんなに、自己紹介のときに、「みんなより年上です。中国人で一す。日本語分かりませんので、教えてください」みたいな。(…)あんまり、周りからも、「中国人だから嫌だ」とか、そういうのはなかったの、自分は中国から来たし、別に隠す必要もないし、中国人と友達になりたい人だったら、最初からもうはっきりとしたほうがいいのかなって思ってたので、普通に言ってますね。(2016年1月31日：Z4)

ただし注意したいのは、彼女は完全に自分を中国人として自己規定しているわけではないということである。とくに中国帰国者家族に特有の文脈として指摘する必要があるのは、中国残留日本人として永住帰国した祖父母との関係である。Z4の場合、来日当初から彼女の祖母は「日本に来ている以上は日本人としておってほしい」という積極的で、かつナショナルなメッセージを家族に発

信していた。祖母が生まれた祖国を大事にしたいと考えるZ4は、この要求を忠実に守ろうとする病気の両親をケアしながら、日本人としての自分もあると考えている。

この文脈は、中学校教員として周囲に「中国人である」と堂々と自己呈示して見せるZ1についても同様である。関東圏在住のZ1は、それまでは緊密な親族コミュニティに埋め込まれていたと話すものの、父親の飲酒と暴力に加え、Z11と同様の送金トラブルに見舞われていたため両親は離婚している。この背景には子どもに「送金役割を背負わせたくない」という母親の意向があるといい、離婚後は親族コミュニティと決別し、関わることなく母子家庭で過ごしたという。そうした彼は、Z4と同様に、外国ルーツを肯定的に捉える学校教員との関係のもと、ベトナム人やカンボジア人といった実に様々なルーツをもつ友人を仲間集団としながら「中国人」としての自分を意識的に構築してきたと話した。

中学校の授業の中で選択国際というのがあったんですけど、そこで自分が日本に居る理由とか、周りの外国人とかが日本に居る理由とか、そういうことを学んだりして、そういう自分の立ち位置が分かって、日本人なのか中国人なのか分かって分からなくなり始めたっていうのが中学生の頃にあって。…自分も中国語がしゃべれるわけではないので、日本語でしか育ってきていないので、中国に行くと、「何人なの」みたいな。「日本人じゃないの?」と思わされる場面がたくさんある。そういう意味でも、どっちつかずに居たときが多かった感じがする。ただ、高校生の後半ぐらいから、意識的に中国だということを考えて生活してきてはいるかなという感じです。

(2015年12月13日：Z1)

彼が過ごした地域や学校は、インドシナ難民として来日した家族が多く暮らしており、彼は自分の出自に早期から向き合う学校文化と隣り合わせの関係にあったという。ここで彼がなぜ「中国人」としての自分を主張できているかについては、外国人当事者団体の「すたんどばいみー<sup>[4]</sup>」に彼が所属し外国にルーツをもつ様々な仲間集団を獲得してきた背景を理解する必要がある。

「(すたんど)ばいみー」があって、教えている子どもたちに、自分がしっかりやらないといけないというモデルを見せていかないと駄目かなって。別に、日本文化にすごい乗るとかどうかするっていうのじゃなくて、工業高校だったんで、何か資格を取るとか、何か武器にしていることをいろいろな子どもたちに教えたかったし。大学まで進学することは結構経済的に負担じゃないですか。じゃなくて、こういう高校で、大学進学しなくても就職ができるんだよとかということも教えたかったし、そういうモデルとして自分が居られればいいかなって。一つのモデルをしっかり見せるために勉強を頑張ってしまった感じです。

(2015年12月13日：Z1)

韓国系・中国系アメリカ人を対象とした Kibria[15]は、母国訪問を通して韓国人・中国人としてみなされない経験を通じて、自らをアメリカ人として確認していくプロセスを描いた。母国との強固で真正な結びつきによる表象をキブリアは「正統なエスニシティ」と名付けたが、一度、大学時代に中国に短期語学留学を経験した Z1 についても日本人の「お客様」という待遇を通して「日本人」としての自分を再確認できるようなプロセスがあったという。また中国語がわからず中国ルーツを確認できる材料が身近には「食べ物」程度だったと語る彼は、正統なエスニシティを獲得したり取り戻したりすることができないと回答する。しかし注目したいのは、一方ではマジョリティとして日本の学校文化に適応してきたとも語る彼が、それでも「すたんどばいみー」のメンバーと関わるなかで「一番日本人に近い中国人として生きていく」自分を構築していることである。「日本人」として日本の主流文化の知識に長け、「中国人」としてマイノリティ生徒の支援を大切にしているという教育方針は、たとえば彼が日本を中心とした生活に限定されているとはいえ二つの国に跨ったエスニック・アイデンティティを培ってきたことを示しているだろう。エスニック・マイノリティ教員が有する意義について金・渋谷は、それが単に彼ら自身の自己実現に落とし込まれるものではなく、既存の学校文化を揺るがしたり社会変革の基盤をつくりだしたりする可能性に注目している<sup>19)</sup>。Z1 は、「すたんどばいみー」で活躍するほかのメンバーが中国語能力をもつからこそ、日本の学校文化や様々な情報に精通する自分を「こういう中国人もいる」と位置付け、生徒に対してロールモデルとしての自分を呈示することができるという。これら 2 名の事例を通じて指摘できるのは、それぞれが良好な学校経験を過ごしつつ、エスニック・コミュニティから包摂されることなくホスト社会の知識理解を深めていった一方、文化的に開かれた仲間集団を準拠枠とすることを通じてハイブリッドなアイデンティティを構築していったというプロセスである。

つぎに、第二のパターンを検討する。上記 2 名と違って異なる形成過程を辿るのが、Z7 (10 歳来日) と Z9 (16 歳来日) の 1.5 世 (学齢期来日) である。1.5 世であることについては、既述の Z4 についても当てはまるが、とくに強調したいのは、この 2 名が親族コミュニティとの関わりを放棄せず、選択的に維持している点である。親族コミュニティから分断した様相を見せた第一のパターンとは対照的に、彼女たちは親族コミュニティから得られる資源を一面では調達することによって出身国での活躍可能性を繋ぎ止めていたことが特筆できる。強調したいのは、Z1 と同様にこの 2 名についても「すたんどばいみー」の活動に参加し、そこで主流社会の知識を獲得したり、文化的に開かれた仲間集団を準拠枠としたりしていたことである。両者は親族コミュニティから度重なる通訳依頼に見舞われてきたというが、一方で「すたんどばいみー」はこうした親族コミュニティに抗う様々な資源形成を可能にしていた。事実、Z7 は大学進学、Z9 は

親族の反対を押し切って大学院進学を果たしている。

彼女たちのエスニック・アイデンティティ形成について特筆すべきは、1.5 世であることと関係して、出身国の記憶や言語に強い愛着を持ち続けているという点である。しかし 2 人は、日本社会での事実上の出稼ぎを希求する家族の文脈に拘束されることによって、出身国に移動することさえ非常に困難だったと語る。例えば Z9 は、「おばあちゃんが亡くなくても帰るのを反対された」「日本での稼ぎがいいのに中国に帰ったらバカだと思われる」と語り、これまで 2 回しか帰国できていない現状に強い不満を抱いていた。こうしたなか徐々に強まる出身国への郷愁の念は、Z7 についても同様である。注目したいのは、来日によって出身国での学業中断を事実上経験し、また移動の経験も限られているため、果たしてどの程度自分が出身国で通用するかがわからない現状に強い焦りを見せた点である。つまり彼女たちは、帰国の機会が事実上剥奪されていくことによって、出身国での活躍可能性を確認したくなるというプロセスを辿っていた。

文書を読むとか文書を翻訳するとか、文書を中国語でまとめるってなると難しいから、大学の中での仕事ってリサーチできていないから難しいけど、どうかが向こうでできるのかなって最近考えています。(あっちでやれるっていう) 確かなものはないですね。…やばいですよね。(2016 年 9 月 22 日 : Z9)

Z9 は、Z4 とは異なり、同じ 16 歳時点で来日したことで夜間中学に編入することしか道はなかったというが、神奈川県「在県外国人等特別募集枠」を活用して高校進学を達成した。しかし、高校・大学時代には日本人の友人が 1 名もいないと回答していることに注意したい。こうした文脈は、彼女が居場所として回答した「すたんどばいみー」に所属しても違和感として働き、多くが日本生まれで日本の学校経験を有する他のメンバーとの差異として捉えられていた。実際、Z9 は日本社会で義務教育経験を積み重ねてきたわけではないため、他のメンバーとは完全に共有しきれないものがあるとして、一方では違和感と疎外感を募らせていた。Z7 は、Z9 とは違って日本の小中学校経験を有するものの、「すたんどばいみー」で置かれた状況は Z9 と同様である。帰国の機会が事実上剥奪されるという上記の文脈と関連して強調したいのは、メンバーから中国人ステレオタイプが向けられた経験が語られ、外国人支援をしているのに、例えば「自分のことしか考えられない利己的な中国人」として理解されてしまうことに歯がゆさを感じていた点である。Z9 は「私はそうじゃないんだ」とこうした中国人ステレオタイプを幾度も裏切りたいと考え、親族の祝い事で親族中が集まる行事を放棄しては「すたんどばいみー」での活動を優先させ、熱心に活動を継続してきたという。その溝はどれほど努力しても十分には埋められなかったというが、日本に基盤を置きながらも中国人としての自分をようやく再確認できたと現在の心境を語った。

…私は意識してました。自分だけが違う。みんなが当たり前前としてもっていた知識…日本の学校のなかで経験して当たり前前なのが私は知らなかったから。みんなと同じように、外れないように発言をしたりとか、すごい意識してました。…ずっと変えようって思っていたけど、でも結果的に、やっぱり「(すたんど) ばいみー」の他のスタッフとは違うってどこかで思った。…自分を無理やりその人たちに合わせなきゃいけないって。思わなくてもいいかなって。気持ちが楽になってきた気がします。

(2016年9月22日: Z9)

日本社会で活躍する一方、帰国の意欲を募らせていく彼女からは、こうした語り付随して、だからこそ「帰る」居場所を確保するために親族コミュニティとの関係は完全に断ち切らず、選択的に関わる道を模索することの重要性が語られた。そうしたなか、Z7は中国留学を決めており、現地では親族の姉に頼りながら低コストの移動を実現できている。そうした背中を見るにつけ、Z9はそのことを羨ましく思っているという。親族コミュニティとのかかわりを完全に絶たない選択だからこそこうした移動の実践が可能になっていくことは注目に値する。

このように、一方では文化的に開かれた仲間集団を準拠枠とし、出身国へ郷愁の念を抱く二人のエスニック・アイデンティティの形成過程は、親族コミュニティから分断した状態にあるパターン(Z1,Z4)とは明確な対比をなしている。しかし共通して明らかなのは、とくに文化的に開かれた仲間集団との出会いが「中国人」としての自分を様々に確認できるよう機能し、日本と中国とに帰属するハイブリッドなアイデンティティの形成を促していることである。自分の出自に誇りを持ちながら成長を遂げるこれらのパターンは、主流文化に同化した上昇移動を見せるメリトクラシー型とは一線を画している。

#### 4.3 「出身国文化志向型」の若者たち

第三は、出身国文化志向型である。このパターンに該当する若者たちは、親族コミュニティから包摂の度合いが強く働くことで「中国人」としてのアイデンティティを強く見せるパターンである。また共通して当てはまるのは、「日本人化」することに親子ともに抵抗を示した点である。文化変容への協和的抵抗が見られるこのパターンでは、中国人としてのアイデンティティ形成が認められるだけでなく不安定な単純労働に就く親を模範とすることによって下降移動が生じていくことが指摘できる。

該当する2名はそれぞれ日本生まれ(Z6)と7歳来日(Z3)であり、当初は中国語の獲得に困難をきたしていた点で共通する。一方、家庭内で中国語が話される状況において、親たちは子どもの中国語能力の減退に明確な焦りを抱き「日本人化」する子世代に警戒心や憤り、そして敵意さえ見せていた。その結果、小学生当時は中国語能力が既に失われていたと話すZ6については中国の現地校に「送り込まれる」選択がとられ、Z3については親族コミュニティに強く組み込まれながら、中国語獲得

や中国人としての自己認識を強くするよう親たちから強く仕向けられていた。こうした背景について、日本生まれのZ3は中国語能力が衰えただけでなく「親に反発する」ことが日本人化の象徴とみなされたことで、親子関係に葛藤や苦悩を多々経験したと語った。

親たちは、中国で育て、おじいちゃんが言ったことが全てなので、厳しく育ったんですよ。とくに自分の父親のほう。だから、父親も、俺に対して、俺の発言は絶対だっていう態度で、それに反発して、結構食い違いとかがあります。どっちかっていうと、考え方が結構擦れ違ったりして、いつも揉めてました。…小さい頃はひどかったかな。今はもう、徐々に分かってくれるように。当時も、父親が言ったことは、全て反発して言い返して。父親からしたら、反発するのはあり得ないってことというか。

(2016年3月8日: Z6)

小学2年生から中国の小中一貫校に通わされ、全寮制で朝早くから夜遅くまで日々勉学に励まなければならなかったというZ6は、結果的に「ほぼゼロ」に等しかった状態から中国語を獲得したものの、現在は「もう中国には戻りたくない」という心情を語り、この間、一度も日本に戻ることなく過ごした彼の学校経験には深い爪痕が刻まれていた。重要なのは、国境を越えて形成される家族に見られる「トランスナショナルな親業<sup>[17]</sup>」の希薄さである。メキシコ系やフィリピン系家族を対象とした研究では、親と子の情緒的絆を繋ぎ止める国境を越えた親業に注目が集まり、頻繁なテキストメッセージや電話連絡を親が入れることで、親子関係を情緒的に繋ぎ止める様子が明らかにされている。しかしZ6の両親は、放置とあってよいほど彼に情緒的支援を行わず、文字通り「放り込んだ」に等しい状態が小学2年から中学2年まで一貫して継続していた。そのことについてZ6は「(親を)恨んでいます」と話したが、こうした経験は子世代の日本再適応を困難にすることを示唆する。しかし親世代は、それでも中国語獲得を達成したZ6を総じて「中国人としての仲間入り」と評し、「日本人化」の危機を脱したZ6の努力を肯定的に受け止めることによって、現在の親子関係は大幅に回復の兆しを見せたという。

ただし、中学2年で日本に「帰国」したZ6の移動は、高校進学を容易にしたり大学進学を有利にしたりする教育戦略として入念に計画されたものではない。神奈川県在住の彼は、小学校から中学卒業までの3年間は日本に在籍していた計算になるため「在県外国人等特別募集」枠を利用することができなかったからである。中国でほとんどトップに位置したほど頑張っていたという彼の学業成績はほとんど無意味なものとして色褪せたという。その後、高校進学だけでなく後の大学進学にあたっては困難は連続し、すでに疲れて学習意欲を喪失しているという彼は、大学時代には留年を経験しており親から勧められるまま現在は親族コミュニティ内での結婚と就職を考えているという。

一方、既述のように、親族コミュニティから強い監視に晒されていた Z3 については高ランクの高校進学を果たした後、その反動として学業意欲は減退していったと語り、親から紹介された中国人配偶者と結婚して現在は 2 児の母となり、親族コミュニティの拠点である公営団地付近に居を構えている。これらの事例からは、親世代が子どもの教育達成に高い意欲を示した一方、子どもの学習意欲を支えるほど十分な教育戦略が伴わないため、子世代の学業意欲が剥奪されていくことが指摘できる。しかし、子世代が学業的困難に見舞われることと引き換えに、親族コミュニティは「受け皿」として機能し親世代の権威は回復していくプロセスが見られた。つまり、子世代を親族コミュニティの一員として取り込むことによって親子関係は安定化するが、子どもの「教育のため」という親世代の教育期待は阻害される。そして、親族コミュニティに組み込まれることによって、子世代は「中国人」としてのエスニック・アイデンティティを強固なものにしていくと指摘できる。

出身国文化志向型の若者たちは、これまで取り上げたパターンとは異なり、主流文化に適応的な、あるいは文化的に開かれた仲間集団を準拠枠とするプロセスは見られなかった。むしろ、親族コミュニティメンバーという、中国文化を共有する仲間集団を準拠枠としていくことによって「中国人」としてのエスニック・アイデンティティを強めていくのである。しかし、そうして深められる親族コミュニティとの関係は、とくに単純労働を中心とした親族コミュニティへの包摂圧力から抜け出せることにはつながらず、日本社会においては下降移動に結びつくことが考えられる。

### 5. 考察

最後に、中国帰国者三世のエスニック・アイデンティティ

ティと文化変容との関連を整理しながら、中国帰国者三世の階層分化に関して考察を行う。図 1 は、前章までの知見を踏まえ、中国帰国者三世の社会移動（とくに大卒学歴の取得）と関連する複数の要因を、編入様式（学校での受容レベル、仲間集団の文化レベル、エスニック・コミュニティへの関与レベル）に注目して仮説的に提示したものである。ここで示したのは、上昇移動を達成する 3 経路と下降移動に結びつく 1 経路の存在である。以下、4 つの社会移動経路を横断的に検討することを通じて、中国帰国者三世の階層分化について考察を加えたい。

まず、上昇移動を可能にするエスニック・アイデンティティとして抽出されたのが、メリトクラシー型とハイブリッド型である。そしてメリトクラシー型とハイブリッド型に共通した文化変容パターンが不協和的文化変容であった。これは、親世代の人的資本を背景に同化速度のズレが生起することを示しており、たとえ上昇移動経路にあっても中国帰国者三世には親子関係にまつわる苦悩・葛藤が生じやすいことを意味する。一方で不協和的文化変容は、これまで親が子どもの統制を失うために下降移動が懸念されるパターンとして位置づけられてきたものの、本稿でこうした知見は支持されなかった。

では、どのようにして上昇移動が達成されたのか。その背景として本稿で明らかにした要因が、主流文化に親和的な「多文化的仲間集団の獲得」、そして「エスニック・コミュニティへの包摂拒否」であったと整理できる。メリトクラシー型については、日本生まれか中途来日かに関係なく、とくに受容的な学校教員との関係がメリトクラティックな価値の受容へと結びつく一方、「日本人として」育つことを支援するナショナルなイデオロギーが潜在している場合には、主流文化に適応的な仲間集団を準拠枠とすることによって「日本人化」が促され、エスニック・コミュニティと自らを「分断」させていく適応過程が指摘できる（上昇移動経路①）。その一方、受容的な

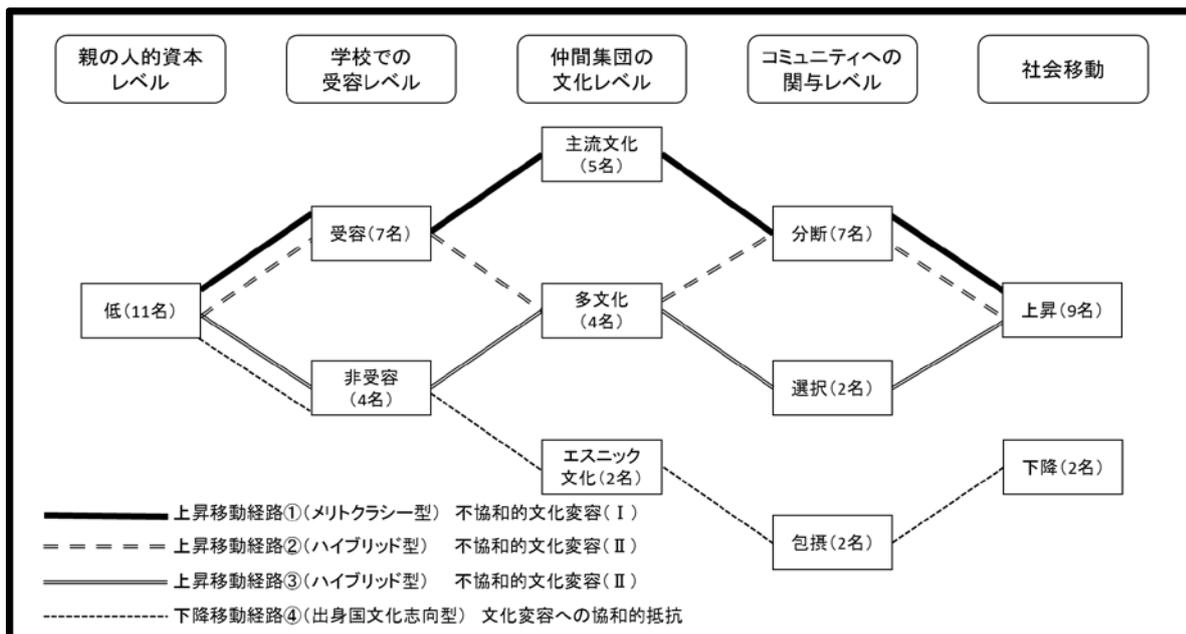


図 1 中国帰国者三世の社会移動におけるエスニック・アイデンティティと親子の文化変容パターン

学校経験にかかわらず、出自を肯定的に受け止めることのできる「文化的に開かれた仲間集団（＝多文化的仲間集団）」を準拠枠とできた場合には、エスニック・コミュニティとの関係を「分断」させたり、あるいは「選択」的な関わりをするかどうかで上昇移動経路の分岐が認められたもの（＝上昇移動経路②・③）、異質な文化を排除しない、開かれたハイブリッド型のアイデンティティパターンが共通して認められた。ここでハイブリッド型のエスニック・アイデンティティの形成過程における多文化的仲間集団の意義について明確にしておきたいのは、それが主流社会からの逸脱を抑止するアンカーとしての役割を果たすだけでなく親族コミュニティとの「適切な距離」を位置取るよう機能することによって、心理的重圧や通訳負担の軽減といった子世代の「自立」を可能にしているということである。その意味で、親世代ならびに親族コミュニティとの関係において苦悩・葛藤を経験しうる中国帰国者三世の適応過程において、多文化的仲間集団の機能と役割は無視することが出来ない。

他方で、下降移動に該当する出身国文化志向型の若者たちは、非受容的な学校経験に加えてエスニック・コミュニティのメンバーとして取りこまれていったという適応過程が共通する。この場合、彼らは中国文化に親和的な親族コミュニティメンバーを仲間集団とし、また準拠枠としていくため、主流社会から距離を置くかたちで「中国人」としてのエスニック・アイデンティティを強め、日本社会のメインストリームに親子ともに参入しないまま出身国の言語・文化に高い価値を置いていくことになる（＝下降移動経路④）。上昇移動経路を辿る若者たちと対照的なのは、エスニック・コミュニティから適切な距離を保つ資源調達に至らない点である。このため、彼らは親族コミュニティから向けられる期待や重圧を相対化することが難しく、学習意欲の剥奪と並行して親世代が就く不安定な単純労働とともに担う相互扶助家族の一人として取り込まれ、下降移動が生じていくものと考えられる。

ただし、下降移動経路をたどる若者たちに、上昇移動をたどる道筋が残されていないわけではない。本稿で明らかにしたように、まず多文化的仲間集団への帰属は、主流社会へのアクセスだけでなくエスニック・コミュニティを相対化し、従来の「閉鎖的」な生活世界を拡張させる資源としての可能性をもつ。また冒頭で示したように、とくに出身国文化志向型の若者たちには日本社会における職業訓練や能力開発の機会を通じて上昇移動の経路をたどる可能性も残されている。その際、閉鎖的な親族コミュニティ内に拘束される若者たちに対して、どのように能力開発の機会獲得が促せるかは大きな課題といえるだろう。本稿では、とくに後者の経路に関する事例検討が行えなかったため、今後はサンプル数を増やしさらなる検討を行うことを課題としたい。

〈附記〉本研究はJSPS 科研費 JP26285193 の助成を受けたのです。

## 参考文献

- [1] 南誠：『中国帰国者をめぐる包摂と排除の歴史社会学——境界文化の生成とそのポリティックス』、明石書店。(2016).
- [2] 浅野慎一：「中国残留日本人孤児に見る貧困」『貧困研究』Vol.3, pp.65-72.(2009)
- [3] 蘭信三編：『中国残留日本人という経験——「満州」と日本を問い続けて』、勉誠出版。(2009).
- [4] 張嵐：『中国残留孤児』の社会学——日本と中国を生きる三世のライフストーリー』、青弓社。(2009)
- [5] 李原翔・佐野秀樹：「中国帰国者三世の文化的アイデンティティの形成について」『東京学芸大学紀要 総合教育科学系』、Vol. 61(1), pp.185-93. (2011).
- [6] 蘭信三：「総論 課題としての中国残留日本人」『中国残留日本人という経験——「満州」と日本を問い続けて』勉誠出版, XVII-LXX. (2016)
- [7] Portes, A. and Rumbaut, R. G.: “*Legacies: The Story of the Immigrant Second Generation*”, Berkeley: Russell Sage Foundation. (2001).
- [8] 厚生労働省：『平成 15 年度中国帰国者生活実態調査』。
- [9] 広崎純子：「中国帰国者二世・三世の進路選択」『アジア遊学 85 中国残留孤児の叫び——終わらない戦後』、勉誠出版, pp. 113-125. (2006).
- [10] 樋口直人：「国際移民におけるメゾレベルの位置づけ——マクロ・ミクロモデルをこえて」『社会学評論』、Vol.52(4), pp. 558-72. (2002).
- [11] 蘭信三編『「中国帰国者」の生活世界』行路社。(2000)。
- [12] Portes, A. and Rumbaut, R. G., *Immigrant America: A Portrait*, University of California Press.(1990)
- [13] Zhou, M. and Bankston III, C. L., *Growing Up American: How Vietnamese Children Adapt to Life in the United States*, New York: Russell Sage Foundation. (1998).
- [14] 清水睦美・すたんどばいみー編：『いちょう団地発！外国人の子どもたちの挑戦』岩波書店。(2009).
- [15] Kibria, N., “Race, Ethnic Options, and Ethnic Binds: Identity Negotiations of Second Generation Chinese and Korean Americans,” *Sociological Perspective*, Vol. 43(1), pp. 77-95. (2000).
- [16] 金亜民・渋谷真樹：「日本の学校における在日教員の実践と意義」『奈良教育大学 教育実践開発 研究センター研究紀要』、Vol.21, pp. 89-98. (2012).
- [17] Parenās, R. S., *Children of Global Migration: Transnational Families and Gendered Woes*, Stanford: Stanford University Press. (2005).

(原稿受付 2017/12/28, 受理 2018/04/16)

\*坪田光平, 博士 (教育学)  
職業能力開発総合大学校, 能力開発院, 〒187-0035 東京都小平市小川西町 2-32-1  
Kohei Tsubota, Faculty of Human Resources Development,  
Polytechnic University of Japan, 2-32-1 Ogawa-Nishi-Machi,  
Kodaira, Tokyo 187-0035.  
Email: tsubota@uitec.ac.jp